

## アジア観光における自然利用の比較研究 ——失われた民俗知の継承に向けて——

研究代表者 関西学院大学社会学部 教授 古川彰  
共同研究者 関西学院大学大学院社会学研究科 博士課程 中川千草  
共同研究者 関西学院大学大学院社会学研究科 博士課程 葛西映史子  
共同研究者 高崎経済大学地域政策学部観光政策学科 講師 今井信雄

### 1 研究目的

本研究は、近代観光によって失われてきた民俗知を捉え、国際的な観光地において比較研究を行うことにより、近代化以前から続く自然との関わりを通して形成されてきたアジア的価値観の底流を掘り起こし、それらが植民地、戦争、観光化の歴史過程においてどのように受け継がれたのか／受け継がれなかったのかを明らかにするとともに、今後のアジア的価値の再構築、ことに自然との関係の再構築の可能性を探ることを課題とする。

21世紀の主要な産業である観光は、グローバル化した国際社会のなかでますます重要である。しかし、観光によってどのような知が消失し、あるいは持続し、新たに生成されてきたのだろうか。それらの知を捉えることによりはじめて、観光をめぐる日本とアジアとの間での関係、日本の社会文化的のありかたについて新たなパースペクティブが開かれるものと考えられる。

代表者、共同研究者らは昨年度グアム・サイパン・テニアンで、本研究の基礎となる実地調査をすでに行っている。そこで明らかになったのは、現地の民俗知（あるいは自然利用の知）が活かされていない観光のあり方や、観光で訪れる日本人たちと現地の人びととの交流の少なさ、植民地や戦争の歴史が観光によって覆われてしまっているという現状、などであった。これらの問題点を、アジア的価値の探求という形で昇華させ、解決の道筋を開こうというのが、本研究のねらいである。そこで明らかにするのは、具体的には下記の四つの課題である。

「第1の課題」として、現地の人びとが所有していた自然をどのようなかたちで観光システムの管理下に置いてきたかということ。

「第2の課題」として、それによって現地の人びとが持っていた自然に対する民俗知がどのように消失・持続・生成してきたかということ。

「第3の課題」として、代表的な観光地における民俗知の比較考察から、アジア的な知の体系を捉えること。

「第4の課題」として、アジアの民俗知の視点から、これからの日本の価値観の方向性とグローバル化時代における望むべき観光のあり方を提言すること、ということである。

今回、調査対象地としてバヌアツ共和国を調査対象地として選んだ。バヌアツ共和国は、メラネシアに浮かぶ83の島々によって構成され、総面積1万2,190平方キロメートル、人口221,417人

の国家である。1980年にイギリスとフランスの共同統治から独立し、首都はポートビラ。ここでは100あまりの言語が存在するが、共通語としては英語とフランス語を土台にしたビスラマ語が使われている<sup>(1)</sup>。

この地を調査地として選んだ理由は以下の通りである。

まず、独立間もないこの国において、人々は自分たちのアイデンティティを確立しつつある局面にある。“Vanuatu”という言葉の意味(=my land)が示すのは、まさに自分たちの文化的アイデンティティが“my”と“land”の関係の中にあることを示している。言い換えれば、近代社会が突きつける「私」と、自然としての「土地」との関係のなかでバヌアツの人々のアイデンティティが形成されようとしていることをあらわしているのである。

そもそも観光という場合は、ゲストに対しホスト社会のアイデンティティを「観光文化」としてまとめ上げ提示する側面を持っている。それは、ホスト社会の人々にとって自己の存在を確認する作業につながるものでもあり、その意味において、この地で起きていることを調査することで、近代が突きつける文化的アイデンティティという価値観を捉え直すことができる。これは、前述の「第1の課題」に対応するものである。

次に、近代化を、ある時系列的な変遷として捉えた場合、バヌアツ共和国は産業化以前に遡るほどの前近代的な生活原理から、近代／現代に至る生活原理まで、時系列的な変化を同時代的に経験している。前述のように83の島々と100あまりの言語を持つバヌアツでは、首都ポートビラのあるエファテ島では観光産業が盛んな一方で、その他の島々では自給自足で衣服をほとんど身につけない部族も生活している。それらの島々から首都にまで出稼ぎに出てくる者も多く、そこに前近代的な生活原理から近代的な生活原理への超克という事態を目の当たりにすることができるのである。私たちの研究グループはそこに、民俗知の生成と持続と消滅を見いだそうと考えたのである。これは前述の「第2の課題」に対応するものである。

そして、この地は、戦争、植民地、観光化という、本研究で視野に入れているすべての文脈を備えている点において、ひとつの調査地において複合的な「比較研究」が可能となると考えられる。ここで視野に入れられているのは、バヌアツ的価値における近代化の過程を捉えることにより、日本が辿ったアジア的価値における近代化の過程をより明らかにしようとする試みである。これは前述の「第3の課題」に対応するものである。

以上、3つの課題に対応した視点から調査研究を行うことで、総合的な「第4の視点」、つまりアジアの民俗知の視点から、これからの日本の価値観の方向性とグローバル化時代における望むべき観光のあり方への提言へと向かっていきたいと考えたのである。

そのような方向性を踏まえ、観光によって生み出された知／観光によって埋もれてきた知をアジアという枠の中で捉え直すこと、そして、日本の中で生み出されてきた自然に対する知を今回の調査研究の枠の中で位置づけることによって、欧米的価値観からアジア的価値観への転換を促そうとすることを意図するものである。

## 2 観光研究史

この節では、具体的な調査地の報告と分析に入る前に、簡単に観光研究の歴史とその要点を紹介

し、調査対象の分析視覚の輪郭を明らかにしたい。

観光学というジャンルは学際的な分野だと言えるが、観光社会学に限定しても、複数の社会学関連分野による横断的な位置におかれており、明確なジャンルを形成しているわけではない。ここで、観光社会学分野に影響を与えてきたジャンルを①人類学②カルチュラルスタディーズ③環境社会学④工学⑤文化社会学という、5つの学問分野として挙げておくことができる。

まず、人類学という学問的性格は、文化の消失と創造、国家を越えた移動、開発と保護など、観光という分野において重要なテーマをもともと内包していた。それゆえ、人類学による観光研究の試みは、人文社会系の観光研究に大きな影響を持ってきた。次に、カルチュラルスタディーズは文化の政治性を中心的な問題とする学問である。観光がさまざまな記号やシンボルから形成されるといふ側面をもつがゆえ、このジャンルではおもに観光の権力関係を論じてきた。また、環境社会学では、観光がもたらす最も大きな弊害のうちのひとつである環境破壊について扱うことが多い。このジャンルでは、「環境」概念を自然や生態系だけでなく人々の生活や暮らしという観点に広げること、自然科学系と人文社会系の両方の研究にインパクトを与えてきた。そして、工学の研究者は「まちづくり論」として観光研究にたずさわってきた。このジャンルでは、社会学者である鶴見和子の「内発的発展論」を理論的なベースとしている場合などが多く、理論的な影響を観光社会学に与えるというより、観光によってまちづくりや村づくりをする実際の活動において影響を持ってきた。最後に、余暇やレジャーを題材とした文化社会学の研究は、高度経済成長期からバブル期に多く見られ、レジャーや遊びの意味を問うという問題意識から経営学などにも影響を与えてきた。

そのような複合的なジャンルによって行われてきた観光研究は以下の4つの問いを考えてきたと言えるだろう。まず(1)「観光文化や観光体験は本物か否か」という問いがある。観光は文化の創造や消失の場面を多く作り出すがゆえ、人類学は「文化」の真正性を長年のあいだ論じてきており、これは観光研究のひとつの研究蓄積として挙げられる。次に(2)「観光文化は誰のものか」という問いがある。これに対しては、権力関係を論じるためカルチュラルスタディーズや人類学において多くの研究蓄積がある。そして(3)「観光と余暇の関係はどのようなものか」という問いがある。これに対しては文化社会学の領域で多くの研究がなされてきた。近年は(4)「観光によるまちづくりはどのようなものか」という問いが多く議論されている。これに対しては環境社会学や工学の研究者らが積極的に取り組んできている。

そのなかで、本調査研究の射程は「民俗知」のあり方から「アジア的価値」を明らかにするものであるという点で、上記の(1)～(4)のすべてに通底する普遍的な問題を内包しているとともに、それを越える領域を持っているのである。

### 3 調査概要

本調査は、古川彰・中川千草・葛西映吏子・今井信雄の4名によって行われた。調査の旅程は以下の通りである。

2007年06月14日 日本(関空)発ーオーストラリア・ブリスベン経由

2007年06月15日 バヌアツ・ポートヴィラ着

2007年06月16日 午前：市内中心部の探索、午後：資料収集

2007年06月17日 ペレ島訪問、島内の小学校訪問、チーフへのインタビューおよびむらの人びととのワークショップ開催

2007年06月18日 午前：National Tourism Office および National Tourism Development Office にて、それぞれのディレクターへインタビュー、午後：Vanuatu Cultural Centre にて 所長および研究員へインタビュー

2007年06月19日 Vanuatu Cultural Centre 所蔵の写真を元に、市内各地において今昔写真撮影およびインタビューを実施、市内中心部の市場にてインタビューを実施

2007年06月20日 バヌアツ発—シドニー経由

2007年06月21日 日本着（3名）、1名（中川）はシドニーにおいて単独で調査を実施、翌22日に日本着

調査は主に、バヌアツにおけるそれぞれの地域、部局がどのような観光化を望み、図っているか、観光化による地元の生活や文化への影響、外部資本の流入および近代化によるローカルな知の変容、以上三つの観点をふまえたうえでみえてくる、それぞれの地域や部局が見出す観光化の意味、地元の知恵を生かした観光の可能性、という四つの観点からおこなった。

具体的には、まず、バヌアツの基本的な統計資料、地図、古写真、観光化の経緯と現在、新旧の絵や写真入りのハガキなどの基本的な資料を収集した後、インタビューやワークショップを実施した。

すでに国内での数回の研究会の中で、個別のテーマとして次のような視点が提出されていた。

食文化と観光との関係（ローカルな食文化は、観光開発によっていかに変容したのか、またはしていないのか）／日常食、外食、儀礼食のあり方と変化（「観光向けの食事」はどのように作り出されているのか。観光（観光客）向けにつくられる「伝統」を「象徴」するような料理の有無。特産物・みやげ物・生産物に関する統計資料）／市場と観光（観光と物品の流通との関係。エファテ島の公設市場およびメインストリートの店舗。観光と物流がどのようにリンクしているのか）／日常生活と観光／観光産業の歴史／バヌアツにおける観光とは何か／ローカルな人びとの日常生活のあり方／観光と環境／環境にたいする観光化や都市化の影響／交通とインフラの変化／観光によって（伴って）生み出されるもの／環境をめぐる運動やキャンペーン、政策

本調査では、これら個別のテーマを迫りかけることで見えてくる、観光の中の自然利用および民俗知の変遷を捉えようと計画したのである。

#### 4 バヌアツにおける「民俗知」

<砂絵>

バヌアツを含め、太平洋島嶼部には、古くから<砂絵(Sand Art)>文化が継承されてきた。バヌアツには100あまりの言語があり、近隣のコミュニティ同士でさえも、言語が異なるため、言葉で

の意思疎通が難しいとされるなか、砂絵は、通信・伝達のツールとして重要な役割を果たすという。また、儀礼の手順や神話の知識など、独自の世界観を継承するための手段としても用いられてきた。

このように砂絵の機能は、重層的である。芸術であり、情報・知識であり、そこから放たれるメッセージは、幾通りにも解釈可能と言えよう。ゆえに、砂絵を描く際には、模様の構造を理解すると同時に、それぞれの模様が担う意味を精通していることが求められる。

エファテ島・ポートヴィラにある国立バヌアツ文化センターを訪問した際には、近所の子どもたちが砂絵を描く姿を目にした。木枠のなかに砂を敷き詰め、自身の指や石などの道具を使って模様を描き、一筆でつなげていくことにより、魚や船といったモチーフ、宇宙や人生を表す幾何学模様ができあがってゆく。その見事な技は、子どもたちによれば、学校の課外活動で習い、身につけていったという。彼、彼女らは遊びのなかで、砂絵への理解、そしてバヌアツの文化への関わりを深めている。しかも、老人から子どもへと受け継がれていくという点で世代間の伝承のきっかけともなっている。



【写真1 砂絵「亀」を描く少女】



【写真2 「人生」を表現した砂絵】

日常生活の一部、日常知の一つであった砂絵は、風雨に晒されれば消えてなくなってしまう。そもそも長期的な保存が見込まれたものとは言い難い。その脆弱性も手伝い、世界無形遺産に登録される動きもある。砂絵の芸術的評価や希少価値のみが強調され、残さなければならぬもの、価値あるものとラベリングされやすい。しかし同時に、描く人びと、それを読み取る人びとが積み上げてきた、「生活知としての砂絵」として、再評価される必要があるだろう。今、学校教育を通して子どもたちが触れている砂絵には、どのような意味があるのか、観光面でもバヌアツを象徴するものとして注目を集める砂絵がバヌアツ社会のなかでどのように位置づけられていくのか。より多機能化する可能性もある砂絵をとりまく環境から、バヌアツにおける観光のあり方、ひいてはバヌアツ社会のこれからが見えてくるのではないだろうか。

#### <ママ・マーケット>

ポートヴィラの中心部には、「ママ・マーケット」と呼ばれる市場がある。ママ・マーケットはその名の通り、ママ＝女性たちが店を構え、主に土産物や土産物を売るマーケットである。以前は、公設市場

に併設されていたが、そこから 300 メートルほど離れた現在地へと移転した。「ママ」の一人は、その際、納得のいく説明はなく、公設市場の近くにあった方が人の目につきやすく、商売がしやすかったと振り返る。

ママ・マーケットに出店するために、毎月いくらかの使用料を納める。一見すると、同じような物ばかりが並んでいるようにも見えるが、実は店毎に特徴がある。それを決定づけるものは、まず、店主の出身地である。店主であるママたちはエファテ島の人のみならず、近隣の小さな島であるペンテコスト島やタンナ島のママも少なくない。よく観察してみると、ペンテコスト島出身のママの店には、出身の島やむらに伝わるオリジナルの編み方で作られたカゴが、他の島のものよりも当然多く並んでいることに気づく。たとえば、タンナ島出身の女性（40代）の場合、タンナ島の知人が材料を集め、加工した物を商品としている。ネックレスを手にした人には、それがダンナ島の彼女の出身地であるコミュニティ独自の組み方であること、さらにそこに意味やメッセージが込められていることを熱心に説明する。このように、他の店とわずかながらも差異化を図っている。

彼女たちが、エファテ島へ渡ってきた理由は、夫の仕事の都合や結婚などさまざまである。元々裁縫が得意だった人は、手回しのミシンを購入し、アイランドドレスやバッグをつくる。2 世代で店番をしているところもある。赤ん坊や子どもの面倒を見ながら、店を切り回すママもいる。朝から日が暮れるまで、そこは女性だけが暮らす小さなむらのようである。

ママ・マーケットに出店する人びとは、元々知人であるというわけではない。はじめは、全く知らない者同士であるが、次第に、その〈むら〉に馴染んでいくという。ある店主が店を離れている間に、客が来ると、隣の店主が相手をする。その客が「せっかくだから、あなたの店で買います」と伝えたとしても、自分の店にひっぱって行くことは決してせず、「いえいえ、このお店で買えばいい。あなたはこの店に客として来たのだから」と答える。それが、ここのルールだという。子どもの面倒を見合うこともあるという。知らない者同士が作り上げてゆく時間と空間がそこにはある。

以上のように、観光化に伴う変化によって、様々な労働形態や不安定な都市部の生活環境で生きて行かざるを得ない女性たちではあるが、その場で新たに生み出されるコミュニケーションの規範は、それまでの経験や生活と切り離されているわけではなく、常にその延長上にあると考えてよいだろう。



【写真3 ママ・マーケットに売られるかご】



【写真4 さまざまな商品】

#### <伝統的飲料カバと女性たち>

カバとは、コショウ科の植物の根本から作られる飲み物で、催眠性や筋弛緩効果があると言われ

る。バヌアツでは、日が落ちると、このカバを飲みはじめる。首都であるポートヴィラには、Nakamals (ナカマル) と呼ばれるいわゆる「飲み屋」＝「カバ・バー」があり、そこに人びとが集まってくる。男性ならば誰もが行き着けのナカマルを持っているという。男たちはカバをともに飲み、踊り語り合うことで互いの親交を深めてきた。

カバは、古くから儀礼では必要不可欠のものであった。それが次第に、日常生活にも溶け込み、嗜好品となり気軽に飲まれるようになってきた。元来、男性のみが飲むことを許されていたが、近年では都市部ともなると、女性が飲む姿も目にされるようになった。それでも、やはり男性のなかには女性がカバを飲むことに賛成しがたいという人が多いようである。

ただし、女性たちが完全にカバから切り離されているという訳ではない。カバはかつて、木の根を人間がかみ砕くことによって抽出されていたが、そのかみ砕く人は、若い女性でなければならぬ、としたコミュニティや地域もあったという。現在では、その抽出の作業には手動の機械が使われるようになり、特にポートヴィラでは人間がかみ砕いてカバを作るという製法はみられなくなった。その一方で、現在でも女性たちは別のかたちでカバが飲まれる場とかかわっている。カババーの横には、「おつまみ」として、バナナや蟹、タロイモをはじめとする多くの芋類を蒸した食べ物を売る店があり、その店を切り盛りするのは女性たちである。彼女らは女性同士でグループをつくって商売をしているのだという。基本的には地元の人々を相手にしているようだが、観光客たちに対して品物も売ることもある。カバはバヌアツの「隠れた」特産品としても知られているのである。

多くの外国人客が訪れる観光地となったバヌアツであるが、女性たちが排除されたり関わることをよく思わないという、男尊女卑の考え方が、カバをめぐる語りから見えてくる。しかし、一見、カバが飲まれる場に女性がかかわることは御法度であるとされるが、間接的に女性はカバと関わっているのであり、そのようにカバやカバをとりまく男性とうまく距離をとりながら、生活を組み立てているといえよう。



【写真5 カババーの男たち】



【写真6 カババー横の売店】

#### <バヌアツ文化センターとのワークショップ「風景写真」>

バヌアツ文化センターは、博物館と資料館の機能を持ち、1975年から139名のフィールドワーカーによって、国全体の島々の生活を記録してきた国の機関である。2007年6月19日、同センター所蔵のとの共同で、同センターが所蔵する古写真の場所17カ所について現在の風景を写真に納めた。その作業は”Port Vila Before/After Workshop”というプロジェクト名で行われた。



【写真7 国立バヌアツ文化センター】



【写真8 センタースタッフとの打ち合わせ】

このような試みは、現在の風景写真を残すこと自体が貴重な取り組みであると同時に、この地におけるさまざまな現実（生活様式・人生の歩み・開発と保護・人々の様子など）を、風景の変化と時間の長さというふたつの軸を交差させることで実感させる作業でもある。自分自身や自分の身のまわりの「文化」を、今と昔の写真の対比から違った視点をもって眺めることができるという点において、可能性の広がる作業であると考えられるのである。



【写真9 Town of Port Vila in 1940's: Hotel Modern】



【写真10 Same place in present: Police Station】

## 5 民俗知からアジア的価値へ

ここで<砂絵><ママ・マーケット><カバ><風景写真>というテーマを、4つの民俗知として捉えるとどのような事が言えるだろうか。それは、バヌアツにおいては様々な場面において、ある種の「文化」を観光に見られる近代化の波の中でひとつの民俗知として変化させ根付かせてきたと言うことである。しばしば観光研究のなかで文化は<生きられる文化>と<見られる文化>に分けられる。前者は生活の中で用いられる必要不可欠な生活様式としての「文化」を指し、後者は観光や祭典などで人々にシンボルとして見られるために行われる「文化」を指す。観光文化は後者のほうとされ、<生きられる文化>から<見られる文化>への移行は、そのまま知の近代化への移行過程を示しているとも捉えられることが多い。

<砂絵>の場面に出会ったのはバヌアツ文化センターである。センターの職員は、われわれに砂絵の意味を説明し、また子どもたちに砂絵を指導していた。日常生活のなかでの知の継承が困難であることを示している。そして同時に、文化センターという教育研究機関が<砂絵>の由来や意味を「他文化の存在である我々に説明しようとする」のは、<砂絵>はもはや<見られる文化>としての側面を併せ持っているということを示している。それは、バヌアツのアイデンティティの一部をも形成する点において、前述のように「多機能化」の可能性を指摘しておいたのである。ここに、民俗知が単に近代化していくのではなく、ある種の「バヌアツ的価値」を生み出しているのだとも言えるだろう。

それは<ママ・マーケット>の様子にも現れている。島々からやってきた<ママ>たちは、それぞれ観光客用の土産物を作って売っているのだが、そのマーケットはひとつのコミュニティを形成しており、生活実践のための文化を生み出している。<見られる文化>である観光という場の中において、<生きられる文化>としてのコミュニティが形成されている。その場にいる<ママ>たちは、自分たちの利益だけを追究するのではなく、わかりやすく言えば「助け合い」のような力を働かせつつ、このマーケットで商売をしている。これもまた観光の中にある民俗知とすることができるだろう。

<カバ>に関して言えば、バヌアツの「隠れた」特産品とされることもあるようだが、いまだ<生きられる文化>の領域のようにも思える。そしてそこには、女性がカバを飲むことを良くないと考える「男尊女卑」的な思考も入り込んでいるようだが、観光化が進むことによって、その思想は変化せざるを得ないだろう。なぜなら、観光用の飲み物となれば、「男性だけに売る」ということは難しいだろうし、また、男性だけに売ったとしても売った後に女性が飲んだら同じ事だからである。その意味で、観光はその地の文化を、どのようなかたちでも別の次元に移していくのであり、その先において、文化がどのように変化するのかを見極めていかなければならないのである。

その一方、我々とバヌアツ文化センターで企画した<風景写真>では、その場に映る風景が<生きられる文化>を示しつつ、それを写真という技術によって<見られる文化>に仕立てようとするワークショップであった。実はその作業は<生きられる文化>から<見られる文化>へという、ある種の単線的な近代化のとらえ方に対するアンチテーゼでもある。そこで行われたのは、自分たちの生活や人生や風景を、別の自分が見つけその意味を考えるとという点において、「相対化」の作業でもある。それは、<生きられる文化>と<見られる文化>を含むような全体的な文化のあり方を捉え、別の生活知の可能性を見いだそうとする作業であった。そして、このセンターで行われている、139人のフィールドワーカーによって島々の生活を記録していることもまた、<生きられる文化>と<見られる文化>を含むような全体的な文化のあり方を捉えようとしているのだと考えることもできる。必ずしも「観光」によらない文化変容のあり方、民俗知の生み出し方をここに指摘することができるのである。

これらの民俗知の多くは「自然」を「観光」に利用することから派生して生み出されてきた。もう少し言えば、「自然」を「観光文化」の領域に取り込むことで、新たな民俗知を生み出しているかのようでもある。それは次のふたつのことを教えてくれる。ひとつは、「観光の内側」から新たな民俗知を生み出すことが可能であるということ。これは、ママ・マーケットのコミュニティが教えてくれたことである。ふたつめは、「観光の外側」から新たな民俗知を生み出すことが可能であるということ。これはバヌアツ文化センターでの砂絵や139人のフィールドワーカーや風景写真のような

取り組みが教えてくれたことである。すると、ここから我々の目指すアジア的価値を考える場合、どのような示唆が含まれているのだろうか。

そもそも観光は、文化的な力関係、経済的な力関係を内包している事が多い。「見る—見られる」という力関係、「お金を払う—お金を受け取る」という力関係、それは文化的経済的差異の中で構造化されている。その点で言えば、そもそも「アジア」は、西欧のもとに置かれたさまざまな構造的な力関係の中に置かれていた。西欧が「期待」するアジアの「文化」は、「素朴」で「遅れた」文化のかたちである。力関係の歴史の中に置かれたアジアが、その価値を観光の中から生み出そうとするには、観光のなかに民俗知としてのアジア的価値を見いだすことと、観光の外側に民俗知としてのアジア的価値を見いだすことが必要となる。〈生きられる文化〉を〈見られる文化〉としていくだけでは民俗知の生成にはつながらない。我々が目指すのは、観光を受容しつつ、それを超えた価値である。それは、人々の実践の中にあるということ、そのことを今回の調査研究から得ることができたのである。

## 注

(1) 2007年8月現在。

外務省 HP (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vanuatu/data.html>) を参照した。

## 参考文献

古川彰・松田素二（編）2003『観光と環境の社会学』新曜社

橋本和也 1999『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社  
大学出版局)

白川千尋、2001『カスタム・メレシ—オセアニア民間医療の人類学的研究』風響社

———、2005『南太平洋における土地・観光・文化—伝統文化は誰のものか』明石書店

Urry, John., 1990, *THE TOURIST GAZE :Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage.

(=加太宏邦訳、1995『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局  
山下晋司（編）1996『観光人類学』新曜社